

夏秋トマトの抑制作型との組合せによる後期収量の向上

農業研究部 トマト・ピーマンチーム

夏秋トマトは、梅雨期の寡日照や高温、さらに着果負担により着果率の減少が見られる。あわせて、生理障害果の増加による品質低下によって9月以降の後期の収量が減少する。そこで、後期収量の向上を目的とした7月定植の抑制作型を確立したので紹介する。

【普及したい技術のポイント】

- ①2本仕立てした開花苗を7月上旬に株間40cmで定植すると9月以降の収量が最も高い。
- ②抑制作型に適する品種は、「みそら64」である。
- ③抑制作型と普通作型を組み合わせることで、作業分散ができ、経営規模の拡大が図れる。

【研究成果の内容・留意点】

1. 栽植様式と収量性

- ①7月上旬に第1果房開花苗を慣行の栽植密度で定植すると8月上旬からの収穫が可能となり、600kg/a程度の収量が得られ、7月中旬定植より収量が高くなる(図1)。
- ②抑制作型では1条植えの株間40cmがよく、株間50cmと比べて収量が増加する(表1)。

2. 品種

- ①収穫期間が短い抑制作型には、可販果収量やA品率が高く、裂果・空洞果の発生割合が少ない「みそら64」が適する(表2)。

3. 収益性

- ①抑制作型は普通作型と比べると、単価の高い9月以降の収量が多い。収益性は2008年度産の販売状況で試算すると普通作型に対して後期作型は、収量で73%、販売額で94%、所得で99%となる(表3)。

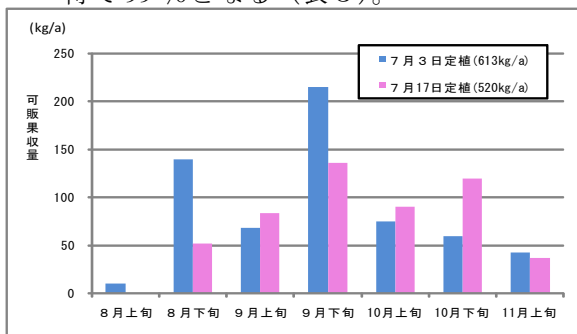


図1 定植時期の違いによる時期別可販果収量

注) 2本仕立て栽培、株間50cm 品種:桃太郎エイト

表1 栽植密度の違いが収量性に及ぼす影響

試験区名	総収穫果数 (百個/10a)	可販果収量 (t/10a)	可販果1果重 (g)
株間35cm	422 b	7.5 b	182 a
株間40cm	405 a	7.7 b	191 ab
株間50cm(対照)	286 A	6.3 a	221 b

分散分析結果 ** 1%水準、* 5%水準で有意差あり
 注1) 分散分析により ** 1%水準、* 5%水準で有意差あり
 最小有意差法により異なるアルファベット間に有意差有り
 (大文字: 1%、小文字: 5%水準)
 注2) 2本仕立て栽培、品種桃太郎サニ一、定植:7月7日

表2 品種別の収量

試験区名	可販果収量 (t/10a)	A品率 (%)	可販果 1果重(g)	裂果(%) C+外品	空洞果 (%)
りんか409	10.8 b	26.0 a	205 ab	10.0 ab	9.2 Aa
みそら64	10.6 b	42.8 b	216 b	2.2 a	5.4 A
桃太郎ファイト	9.0 a	27.0 a	176 a	7.9 ab	13.3 ab
桃太郎サニ一(対照)	8.8 a	23.3 a	187 ab	17.2 b	17.9 b

分散分析結果 * 1%水準、** 5%水準で有意差あり
 注) 分散分析により ** 1%水準、* 5%水準で有意差あり
 最小有意差法により異なるアルファベット間に有意差有り

表3 普通作型と抑制作型の時期別可販果収量と収益性

作型	月半旬別可販果収量(kg/a)								合計収量 (kg/a)	販売額 (千円/10a)	手取金額 (千円/10a)
	7月下旬	8月上旬	8月下旬	9月上旬	9月下旬	10月上旬	10月下旬	11月			
A 後期作型				187	223	127	153	101	791	2,394	1,775
B 普通作型	259	202	143	130	99	85	112	60	1090	2,556	1,785
	A/B								73%	94%	99%

注1) 2本仕立て栽培、品種:桃太郎サニ一、抑制作型(7月7日定植、株間40cm)、普通作型(4月25日定植、株間50cm)

注2) 販売額はトマト部会の販売単価を参考。手取り金額は出荷経費を除いたもの。